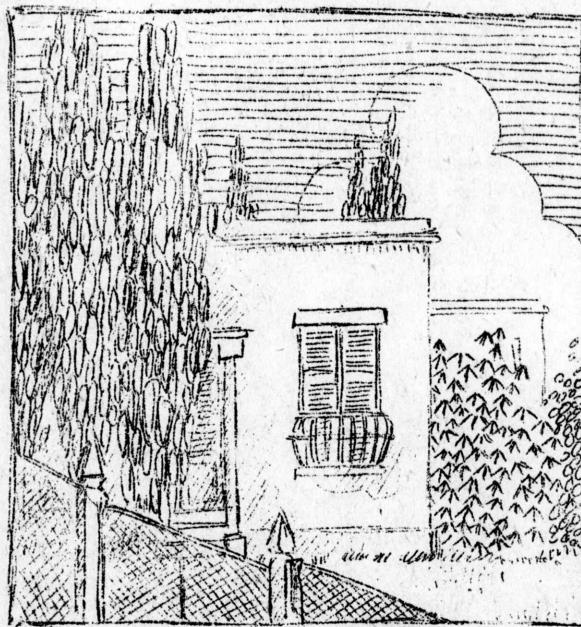


亞爾然丁 時報

文藝附錄

第卅三號

卷五十八



Feb.
de
1930

詩と歌

Año V
Nº XXXII

SUPLEMENTO LITERARIO

"El Argentin Djijo"

小説
流浪
狂自生
(二)

それが一年余り下宿で寝轄んで居た秀夫には窮屈の日が来た。
煙草代は友人から借りる仕事を見付けに行く電車便まで下宿屋の親爺に頼まねばならぬやうに付つて來た。人の世話、新聞の広告で仕事を探しして歩いたが語学不文分が新家の彼には中々容易か仕事は見付からなかつた。一時のづれに或医者の内にムカモとして若ちついたのは毎年の八月の中頃だった。
朝は早く起きて掃除をしなければならなかつた。晝は主人の給仕をする——玄関の應対、時には食食の呼びにまで玄関へ走らなければならぬ。ムカモ生活は中々不慣の秀夫には容易ではなかつた。
とくすれば遅れ勝ちふらひ仕事と時々手傳つてくれたのは、その主人の末娘マギータであった。一名前はマルガリータだつたが娘は自分自身もマギータと呼ぶ變り種であつた。秀夫が氣まぐれ者のマギータと仲よく打つたのはそれから一週間程でそがりであった。
或日の午後二人は疲れて熱い／＼ソックスをした。塗引きは継続いた。ドクトルの茶木娘とウンムカモハヤキスとは、他所目には見られふ珍奇が恵をしたのである。マギータの買つて呉れる煙草は何時もカメリであつた。小さなカルテーらからつつそりと煙草代を呉れるマギータは秀夫にはたまらなく可愛いものであつた。
日本の恵の思ひ出は時々秀夫を陰鬱に包む——のである。日本脱出の動機——彼女の裏切り——中学教育との結婚——此の茶木娘との出来合ひの愛憎！

悪の進展には語学が必要であつた。語学不^充分^充彼に
は、悪の極みを畠み得た様に思ふもの、何となく不安が
あつた。而し二人の逢引^{ハグ}は続く……。
少し二人の仲は別體、その姉娘によつて疎れな
秀夫は、その家を去らなければならぬ。そして新し必事
を探さねばならなかつた。別れるとなれば悲しい気がす
るが仕方はほつかつた。少しはかりの荷物をまとめて、田舎に
落ちたのはそれから少し計り難づけがうであつた。
ある田舎の農場に働く様にふつた秀夫は、飲むより何の本
しみも知らぶがつた。
二円儲けては二円飲む、十円儲けては十円使つた。
酒と女! 每日働いては安價な慰安と求めつゝ、その日々
を過すのであつた。
ブエスのマギータ^{マギータ}らは時々手紙が来た。字引と音引し
て、スペイン語の手紙と思案枚^枚首で読む。秀夫の心は最
早や取り返へしのつかない程荒んでゐるのであつた。
ラ・ファン、慈父、慈と痴呆の夢と汽車の煙は消へるもんだ。
手に烟もうとすればスルリと抜ける。また烟んだ所が男女
の情事に行くまでだ。慈はすべからず……。
こへぶ醉つ拂ふ口調で書いてゐる日記は、其の頃のもので
あらう。
田舎のボリッヂで買ったロテリア^{ロテリア}ガーラパンのフレミ大に当つた
のは翌年の四月頃であつた。
もう四五五枚も持つて居ればなるア^ア。そこで一枚のデシモ^{デシモ}と大事
そうにボルシリヨンへれた秀夫が、金を受取りにA駅から
汽車に乗つたのはそのままの直後であつた。
ブエス・アイレスには秀夫の爲めにはサタン^{サタン}がまい。
金と愛取るゝ果報は腰で得てだ、少ソト間違つた果報は
飲んで待てが^など、千ペソを手にした彼は飲み續け
たりであつた。

クリオージャ来るを相まよ去ると進はず——と、香粉薫る唇の紅い女と相手に歎那くの徽章と進みつけた。

植民者としての健康を持ち合せてゐるふい秀夫が——平素の不規律が生活が災いして、患者から肺病と診断されたのはその年——一昨年の五月であった。肺病と診断されたのはその年——一昨年の五月であった。肺病と診断されたのはその年——一昨年の五月であった。肺病と診断されたのはその年——一昨年の五月であった。

如何に自暴自棄になつてゐたとは云へ死の恐怖は彼を

蘇するに充分であつた。

食は云々で、秀夫は恐怖した。死神の前に戦ひた。

も肺病で死んだのだ。咄嗟に頭にござつて来る、大

不治の病！ 誰るべき友も云々、こゝ異國死は遠つて来る。

如くに陰府の磁石は吾を引きつけてゐる！

音からは、養生にゴルドバに行つてはどうかと勧告され

た。

灰色の空氣！ カトリック尼僧のエンセムーラー

が波帶的が氣分と起つしむるS.M.病院！

まよ死ふば死ね!!

度胸を定めた秀夫は、その夜自分に醉つ拂つてさ

せめても此の世の見納めにと、カベレー・フロリーダに悲痛

足取りと向けたのは夜の前後であつたらう。

に這入つた秀夫はすぐにライスメーと注文した。

うへれけに酔つ拂つて殆んど視覚のふい秀夫はニ曲三

踊子盡に擁せられて、踊り狂つたのであつた。

酔つ拂つて氣を失つたのは一時半頃であつたらう。

暫くは人事不省に落ち入つては無つたのであつた。

三.

ある時はハルディネー口にある時はガジネー口に、隣々と
交わった仕事と求めでは、独り自分の心を慰めてゐる縁鳥が
ブエヌ海外の養鶴園に仕事を見付けるのは一昨年の二月

この中頃で未だ南国の夏であつた。
ブエヌは、カルナベルで賑がだ。
口賑が、カルナベルより、ヒヨツ子相手の此の方ガ余程
面白いやア占と、独り言を云ふが、無邪氣ふ小さふ鶴
相手に暮して居る縁鳥は思ふともふく日本の事を思ひ
出す。

そうだK子の家には大きが養鶴場があつた——そして

眞中に大きが木もあつた。奇朝小さふ鶴鳥に鮮と置

るのは彼女の日課であつた——そして彼はあの木の影

から——見て居つた——それからK子の学校卒業発の上

京——信じて居た筈のK子が突然結婚——対手は金碑

件の同級生——

こんな古い追憶にふけりながら、縁鳥相手に仕事してゐる

自己をハッキリと見出さうであつた。

何人といふ二重生活だらう、殖民地に来て未だ植民有らしい

意志に返しかけ自分は何とか不甲斐無い男ぶんぢう

……K子への愛着が……而し早や二人の子供の母になつて

居るでは云々

忘れやうと努めても忘れられぬいふ日本のお出来事や感

やの情が、何時まで彼をこの此の生活に止どませやう……

可なり俗事に無関心な彼が酒と女に走り出したのは疊い

とは云へ、勢ひ止むを得ふい境遇に置かれてゐるからであ

つた、自ら堕落！ 自暴を意識しながらも、デカタリズムが

生活に落ちて行く自分自身を止めやうとはしなかつたので

あつた。

マイブー街の豪傑のカワードや、二十五街の豪傑のベーなどに

は毎晩、飲みに行くのであつた。そして女を演るのであつた。

然し職業的のブルーサやボラカなどの雇用にはじめ失望

してゐた彼は遂に踊り場に行く様にふつたのであつた

濃紅が唇のすみ、くらか上品に見へる縁鳥、惡魔の笑

いに似たジャズの誘惑。豊がでぶは彼のボルシード。
瘦せて行くの毎日見へる、最う六八歳残つた財布
を見て苦笑した綠島は、
ソノダ今晚限りでまたカンボに行かう。そして又少し
衝へ出て来てやう。
醉ふ爲めには安ヴィーノで我慢するが、カバリエの酒は高い
グランアーヴィーノ。
ボリッヂで可おり酔つ拂つた綠島がカバリエフロリード
に流れ込んだのは、夜も遅く、一時と少し過ぎてゐたりであ
つた。

× × ×

踊子達や、モツソーニ介抱せられて漸く秀夫は正氣づいた。
見知らぬ一人の日本人がコップに水を持つて立つて居る。
漸く正氣づいた秀夫を見ると、向ふから声をかけた。
「もう安心し給へ、大丈夫です、ハア僕ですが、僕綠島慶二
と言ふのです。」
秀夫は手を出して握手を求めた。
「僕、松村秀夫と言ふ者です、どうかよろしく……」
日本語の分らぶい、踊り女や、モツソーニは呆氣にとられ
てゐた。
秀夫の醉体を心配した綠島はその夜、秀夫を自分の下宿
に連れ込んで、自分の力で寝させてから、自分は床の上に鋪
び寝をして一夜と明かせたのであつた。
腰に言ひ知れぬ苦痛を宿して居る二人の青年、人生の
流浪に淋しい遭る穢ふい心を抱いて、一夜の體体と踊り
場に求める此の舞島と死出の旅路の名残りにてたつた一
夜の愉快？と踊り場にござんとした此の舞命兒松村
秀夫。

意味こそ相違あれ、悩みは同じ此の二人の青年が相許す
るには数日と要せなかつたのは事実だつた。

それから二人の交際は續いた。秀夫の荒んだ心を次第に穏ら
いで行つた。綠島も秀夫の過去を聞いた時には、誰にも同
じ失意の一史はあるのがと苦笑したのであつた。
それから綠島は、比較的陽気な氣持にあつて行つた。然し
秀夫の病氣——肺病——そして近いうちにコルドベに行
かなければならぬのだと、聞かされた瞬には流石の綠
島も驚いた。
秀夫君、肺病にはコルドベより外によレ所があるよ。
あの池塘的空氣のコルドベのX市ふんかより出来得べ
くんばラ・リスバ州のチエシートで養生した方が良レと云
ふ話だよ、恐ろしく空氣の乾燥してゐる所で、たいていの
肺病ふんか直ぐに治るそ、だ。それに君ふんかはア人だ
未だ初期と言ふじやないが、そこへ行つて君の病氣と養
生しやう。時に君は汽車賃があるがね。
尤も、君一人分と少々あればよいよ……嘗て、僕は汽車
で行くよ……ハ、所謂無賃乗車う……

其の時、秀夫はロティアの便ひ残りが三百ペソ余りあつた
であつた。綠島と秀夫がレディ駅から汽車に乗つたのは、それから
四五日後の事であつた。

四

腰掛の堅い二並列者は、いつも殊ニ喜太の事有物だ。
クエーリヨ庫中よりか、首巻腰中が多し。
面白半分の旅人も居やう、
仕事求めて田舎に行く者も居やう。而し、草内のどの座席
にも肺病患者らしき者は、只一人も秀夫の目にば映らふ
かつた。

轆輪に夜の幕が下りて電燈が着くと、クリスマスの連中
はアルコレーランプを取り出して車内をマテと飲み出す。

支那の阿生は亡國の珍榮だと、英人は云々あるね。
徒らにマテを飲んで、物と思索にふけるでもなく、ギタラと
マテに人生を憐す比の土着の人達を看並當時は階分珍
奇に見てゐたが、今じや——こうして流浪が続くて慰めシ
る心の、唯一となつたね。

まさか、國の珍榮で、むずらしいよ。

（四）

僕も田舎でマテの味を覚へたが——ね、月とギタラと

（五）

スンブを離れて、マテに生命があるだらうか——

（六）

スヤー、Rの池に来たよ、見給へ、綠島君。

（七）

恐ろしい水量だね。

（八）

結局は空から首を突出して外を見てゐる。

（九）

最も行けば、己市が見へるよ、S.M.病院も……

（十）

河の流れと空気はよいがね。

（十一）

さあ、病院と聞くと、秀夫の氣持は陰鬱にふつた。

（十二）

綠島は悪い事と言つたと思つたのか、話しへ轉換に努め

るのであつた。

（十三）

君、フルス・デ、エフエで乗り換へたらもう、藍緑だ

（十四）

明日の朝はチレシートに着くよ。

（十五）

毛布を被つて少し寝るがね。

（十六）

秀夫は中々眠れなかつた。

（十七）

扇風機の腰掛の上に、直ぐに寝付いた綠島の寝顔を見て

（十八）

いた秀夫も、いつの間にか、整い眼氣を覚へて、何時の間に

（十九）

ねむりに入ったのであつた。

（二十）

無心の汽車は、夜の闇を北へと走るのであつた。

（二十一）

(つづく)

詩

何故に、悲しき秋

てつ殊

寂しい……

あ、

枯草をふむ

葉音に

急に

林の小鳥産の歎

やがて

草葉の木に消え行く

一園となつて

暮れに消え行く

残るは

僕と

林に廻る

青き空のいた

秋と幻影

てつ殊

（4）

それには
人々の未だ生まれない

秋である
誰れにも
新鮮ふ
空だ

久し、太古より

久して
人々の邊にさび行くであらう

遙るが木末にも

遠く
地をみつむる

静けき瞳よ！

かぶしき瞳よ！

タ暗は
ゆえ知らぬ悲しみを
つかれた田舎に流してゆきます。
いつも鐘の重みを怖れてゐる
それでも黙らずに
自由を夢みてる。

×彼奴等は
倒錯妄想症に罹る

北岡 健

彼奴等は
倒錯妄想症に罹る

北岡 健

なにか夢を描いてゐる

こゝろは可哀想に
いつも鐘の重みを怖れてゐる
それでも黙らずに
自由を夢みてる。

×二の故郷

嘉数伏舟

水が空グララタ河

けぢめも分かず

涙でしも知れず

野ヶ雲ケンバの祭

花の如く美しく

眩野漢々として日夜流れ

黄水滔々として永劫に横はる

嗚呼偉大ぶるかあ

吾ガオニの故郷

アルゼンチナ國よ。

道行く小女は

花の如く美しく

人の情は厚くして

人種の区別薄く

清き大氣は

慈母の乳房にも似て

甘く薰しく

無盡の宝は

沃野千里の裡に埋れて

吾人の東り求むるを待てり

お、恵まれたる自由の天地

吾ガキニの故郷
アルゼンチン國よ

吾ガ魂はこの地にて生れぬ
吾ガ愛人はこの地に住めり
輝き漫る天つを仰ぎ
歡喜と希望に満ち満ちて
吾ガ永住の地を想ふ
お、愛しきりふ
吾ガキニの故郷
アルゼンチン國よ

夕暮の町の一角から。
病める一匹の大現れた。

幻滅 伏舟

夢に上下のあるものか
かがはぬ患と知りぶさら
ひとり淋しく床の上に
夢の國かるお嬢さん
いねも思ひて苦しんだ
患に隔てのあるものか
まぶらぬ世と恨みづ
野暮え山越えわが魂は
君を慕ひて泪する

一九三〇・三一

車はこの世の
圓錐音をうけて
固く閉ぢ
ふらふらと夢遊病者の足は
食にうゑた其の体を置ぶには
弱きをなげく。

空の無数の星を
上緒の月は
やはらかき光を喫へてはくれど
今の後には
何の感興もなく
塵ための食をあさり
窓せ細りし其の針金の感覺に
がすかぶ刺激を喫へるのみ。
まかうぶ胸もも
茶褐色のそれらの毛も
塵によこれでは居れど

~~~~~(6)~~~~~

去りし日頃の想はれる  
然しまだその心に  
青春の想ひはあせず  
懐ましの歎夜をば  
温せし帶よ。

ふらふらと  
なほも亦夢を見つ  
闇の中に映し出された  
影を追ひて消えて行く  
彼は病める一匹の大である。

一九三〇・二一五

### 歌 夏の日

コリエンテスにて

て い 子

湧き上りやがて消ゆく雲の峰  
たどるさだめのはてしふき旅  
のそみある朝日よりなほ夕はえの  
さびしさ好む君ぶりしかば。  
悲しきは西の御空に消えはて、  
雲が出来ばかりうつくしがな。  
たわむる蝴蝶あやふしだ度も  
色香とかへしあらういの花。  
ふと目醒の遠くみなりの開ゆ時  
はてしゃあらすじのあわふ哉。

待ちわびて コリエンテスにて  
智ひし心に恵ぢよふた度は  
あはじとぞづら筆とりて見?  
まちわびし消息さがせあかりがねの  
見る間に處く御空ゆくなり。  
後の世はあほろざともに身をなして  
月の夜すがらすだきもあらなむ。  
招けども訪ふ人もふし余すさ  
たれうらみつ露と消ゆらむ。  
文々らに身を横たへてうたぬの  
夢夢にやまわを小雨かる宵、

うや世 伏 珠

今年より恵すべからずと嘗めしが  
月日たてはやはり恋しい  
酒との金もなく昨日より  
屋敷を喰めて心いためり、  
この男油断はあらじ物去へば  
大口あけて笑ひけるが、  
この男なす事もなく小庭中は  
寝言に譲とうたひ居るかぶ。  
来ることに金の儲かる話のみ  
しては別れぬ子の男さ男。

破れたるパンタロン着てこの女は  
金のなる木にあこがれゆくも。  
心慰まる一木のわが友。  
近よれば船とぶりてわかれ魂も  
身も焼くばかり火を吐く女。

編輯子より

校書家諸氏へ

此の頃「詩と歌欄」の投稿が猛烈に盛んにござつた事を讀者と共に喜んでます。  
そしてこれらが盛んになると同時に批評と談げよといふ希望の投稿が沢山舞ひました。おるべく簡単にごしく御批評をして下さい。希望欄にふるい出されらるる批評は没書にしましますし又余りにだらしく長いのは簡単にはおほすかも知れませんからその点は御注意願ひます。

紙上匿名は差々へふきも、住所氏名は明記のこと。

論文創作隨筆

別に規定は設けません

和歌俳句 题は隨意

▲自分の原稿と一字一句の間違ひはふい様に……とが先週これの間違ひのアーフ

つたから次号で訂正して置けとの御注

意がちよいあります。御注意通り

特別に注意して校正致しませう。  
但し次号で訂正云々は限られた紙面に  
載せ切れ無い程の投稿がある位で到底不

可能ですから御諒承願つて置きます。

又いかには祭稿それ自身に語字や文法上の誤りが非常に多くなりとて没書に付するには惜しいといふの山澤山あります。

さういふのは本誌の品位を保つため止むを得ず訂正致しますから投稿者御自身原稿とよく御比較されん事を希望します。

▲末月号より批評欄へ批評及

希望投稿と募集します

文藝附録編輯係